

INDEX

巻頭言	1
寄稿1 高所医学からみた富士山頂の魅力	2
寄稿2 富士山測候所の歴史を訪ねて	3
活動ドキュメント 2017	4-5
ACPM2017 レポート-1 ACPM2017 を終わって	6
ACPM2017 レポート-2 国際シンポジウムの舞台裏から	7-9
助成事業報告	10-11
【コラム】 窮地を救ったプロジェクト	12

芙蓉の新風

<http://npo.fuji3776.net/>

ACPM2017 特集号



「一富士二鷹三なすび」は静岡県にゆかりが深い。国際シンポジウム 2 日目の One-Day-Trip に出発する前に会場となった御殿場市・時之栖にて撮影 (11.7)

巻頭言

理事長 梶山史郎



新年おめでとごさいます。希望に満ちた新年をお迎えになったこと、お喜び申し上げます。今年も認定 NPO 法人富士山測候所を活用する会をよろしくお願いいたします。

2007年にNPOとして最初の山頂での観測を始めてから丁度十年、研究・活用は、昨2017年にはこれまで最多のプロジェクト、延べ377名と大幅に増えております。参加延べ人数こそ昨年度よりは減少していますが、継続プロジェクトのアクティビティはむしろ向上しており、観測・研究の効率化が大幅に進んでいます。夏の観測だけにとどまらず、通年無人観測を継続する研究も5件に増えています。

このような観測・研究の成果から、3700m級の高地における大気環境が実は地上に暮らす私たちの環境と密接に結びついていることが明らかになってきています。これこそが、南極・北極などにも負けない日本で唯一の極地とも言える富士山頂で様々な観測を行うことの重要性を示すものだと思います。

昨年は山頂での観測開始10周年を記念して「山岳域における大気化学・物理に関する国際シンポジウム (ACPM2017)」が富士山の麓、御殿場市で11月6～10日に開催され、12の国と地域から101名の参加者を得て、成功裏に終了しました。このシンポジウムは3～4年に1回開催され、これまで欧州と米国で開催されてきたので、今回はアジアでの提案を受け、NPOとそのメンバーが中心となって開催したものです。海外からの参加者も、雄大な景色と清新な空気に深い感銘を受けたようです。

さて、測候所の利用についてはこのところ新たなプロジェクトも増えつつあります。2018年度の研究公募もすでに始まっており、新たな研究への期待が高まっています。しかし、測候所とNPOの現状を見れば、庁舎や関係設備などの老朽化、今後起こり得る災害への備えなど、問題は山積しており、厳しい財政状態の中で活動資金の確保も継続的な課題です。日本の最高地に立つ貴重な施設を、今後とも学術的に活用し社会への貢献を続けていくため、研究会への積極的な参加と、本会運営への一層のご協力をお願いいたします。